

北斗句会自選三句（令和七年） 五十音順

（六年六月～七年七月の間の四十二句から）

含む笑み

石田きよし

生きるとは残さること鳥雲に
それぞれが何か言いたげ干し大根
武装せし埴輪さやかに含む笑み

チヨモランマ

大崎石州

タクラマカン砂漠に独り月の友
ロンブク寺の鳥葬跡のうそ寒き
満天の星奔りたるチヨモランマ

梅 雨

太田黒幸風

忍び寄る加齢の不安梅雨に入る
長き夜や推敲重ね一句詠む
幸せは三代揃ふこどもの日



悪友

大森康正

悪友と思ひ思はれ八十の春
遡上する若鮎の影瀬に光る
声明の渡る境内秋深し

若葉風

川崎きごう

声明や森も林も笑ひをり
若葉風上総の海の碧きかな
夏場所や大和の綱へ大の里

同期会

竹内雲泉

同期会枝豆が出て話題替へ
読みかけてごきぶり叩く新聞紙
彼の人の月命日や涅槃西



破れ傘

田中資凡

春の雷仏拝めと父の声
二人して花の人手に酔ふ一日
境涯を埋もれて生き破れ傘

畑打ち

長池豆陽

行儀よく孵化を待つごと梅ふふむ
身のこなし鬼ごっこめく赤とんぼ
畑打ちや鍬の重みで韻を踏む

昭和の子

藤田紀潮

柿挽ぎて追はれたる日よ昭和の子
波のたりはてなくつづく土佐遍路
けふここに締めめの句会や半夏生

